

第6回 明日のビジネスを担う 女性たちの交流会 in 大阪 開催レポート

2017年11月6日、大阪にて「明日のビジネスを担う女性たちの交流会」を開催し、今年度も200名近い方々にご参加いただきました。パネルディスカッションでは、株式会社読売新聞東京本社編集委員の永峰好美氏をコーディネーターに迎え、3名の女性リーダーから仕事の経験に基づいたメッセージをいただきました。

パネリスト

奥野 美奈子氏 株式会社京都銀行 金融大学校 学校長
神崎 夕紀氏 キリンビール株式会社 執行役員 横浜工場長
桑山 美穂氏 株式会社阪急阪神百貨店 執行役員 人事室長

コーディネーター

永峰 好美氏 株式会社読売新聞東京本社 編集委員

※肩書および経歴については交流会開催当時のものです。



奥野 美奈子氏
株式会社京都銀行
金融大学校 学校長

「“来るものは拒まない”と心に決めて続けてきたからこそ、 チャンスを得ることができた」

学生の頃は何にも制限されずに素直に育ってきたのですが、いざ就職活動が始まると、請求資料は一向に届かないし、企業訪問にもまったく取り合ってもらえない。同級生の男子学生との違いを目の当たりにしてショックを受けました。無事に京都銀行への入社が決まり、預金係として店舗に配属されると、上司から「女性は戦場の花ですから」と一言。私は仕事をもっと覚えたいのにと思いつつも、まずは文句を言わずに任務を全うしようと一生懸命働いているうちに、あれよあれよという間に支店長になって今に至ります。

出産後も男性と一緒に深夜まで働き、仕事が終わらなければ家に持ち帰って、目の下に真っ黒なクマをつくって翌朝出勤するという毎日でした。そんな中、子どもが緊急入院。私は通常通り業務をこなし、仕事が終わってから病院に向かいそのまま子どもに付き添って、朝6時に家族と交代して会社に行っていました。そんな私を見兼ねた夫の両親に「何のために働いているんや。どうして会社を休んで子どもの面倒を看ないんだ」と諭されました。当時は男性と同じように働かなければという妙なロジックにかかっていた、何が本当に大事かを考えていなかったと深く反省しました。ですから、部下たちが子育てしながら相応のポジションに就いてくれているのはすごく嬉しいですね。

役職者として自分の裁量も少しずつ増えてきた頃、本来は自分の担当ではなかった業務を「私は大丈夫」と勝手に思い込んで処理をして、大変なミスをしてしまったことがあります。後から振り返ると、少し仕事ができるようになって傲慢になっていたのだと思います。チームを頼りにしなかったことが最大の失敗であり、反省ですね。

私は嫌な仕事も、苦手な人も、来るものは拒まないと心に決めています。そう思って続けてきたからこそ、いろいろなチャンスを得ることができ、それが自信にもつながったと思います。チャンスは必ずピンチとともにやってきます。つらいと感じるときには、「もしかしたらチャンスかもしれない」と自分に呪文をかけて仕事に前向きに取り組めば、自分自身の夢と希望が叶っていくのではないかなと思っています。



神崎 夕紀氏
キリンビール株式会社
執行役員 横浜工場長

「チャンスはいつやって来るかわからない。 その時にプラスアルファで応えられる実力を蓄えておく」

私は2年ほど大学院で学んだ後、地元福岡の医薬系ベンチャーに入社しました。診断薬の開発や品質管理などに携わっていましたが、やはり自分が好きなものづくりに携わりたいと思い、キリンビールに転職しました。メーカーに入ったからには「製造ラインで仕事してみたい」と希望を出し続けていました。思ったことは言うてみるものですね。5年ほど経った頃、ちょうど建設が始まるタイミングに神戸工場への異動が実現し、異動後しばらくして憧れだった醸造工程の技術員になりました。そこでキャリアを積み、栃木工場では製造ラインの部長になりました。醸造部長という役職に女性が就くのは初めてでしたので、声がかかった時は本当に驚きました。会社も変わろうとしているんだと実感しました。その後、本社で9工場の生産統括やR&D研究所の副所長を務めた後、古巣の神戸工場に戻って工場長になりました。

製造現場の基盤になることは、ほぼ神戸工場で学びました。チームで仕事を進めていく時に、仲が良くてうまくいくところだけで調整して進めようとしがちなのですが、じつは自分の苦手な人がキーを持っている、その人のところに行かなければ解決しないこともあるということを経験から学びました。今でも、苦手だと思うところに自分から踏み込んで、積極的に対峙していくようにしています。

チャンスというのはいつやって来るかわかりません。やりたいと思っても10年チャンスが来ないから、もう一生やって来ないと思ったら突然降って湧いたりするのです。そのチャンスにプラスアルファで応える実力がないのは不幸なことです。向いている仕事、向いていない仕事というのは、じつは自分が思っているほど自分のことを正しく判断できていないことも多いので、ぜひ目の前にある仕事に全力で取り組んでいただきたいと思います。その経験は必ずプラスになるので、どんな状況にあっても腐ることなくエネルギーを貯め続けると、チャンスをもたらしたときに貯めたエネルギーを百倍ぐらいにして爆発させることができます。何ひとつ諦めることなく、欲張りになっていただきたいですね。



桑山 美穂氏
株式会社阪急阪神百貨店
執行役員 人事室長

「様々な価値観のメンバーが共通のゴールを目指して 達成したときの喜びは、一人では成し得ない醍醐味」

百貨店で婦人肌着の売場からスタートし、少しずつ催事を任せられるようになったのですが、マーケティングの知識もなく、最初は右も左もわからないまま当たりでやっていた。それでも自分なりの工夫で商品が売れたり、お客様に感謝されたりするととてもうれしくて、一生懸命取り組みました。この経験が私の仕事の原点になっています。婦人服のバイヤーになった頃には、仕事が本当に面白くて夢中になって働いていました。

転機は妊娠したことです。前例もなく、子どもを産んでからも仕事を続けられるのかとすごく悩みましたが、せっかくこんなにやりがいのある仕事なのだからバイヤーとして戻ろうと決心。産休明けにはフルタイムで復帰し、それからの数年間は本当に忙しかったです。今こそ働き方改革と言われて仕事に対する時間意識が高まっていますが、当時は遅くまで働くのが当たり前という時代で、自分だけが仕事を切り上げて帰るのは申し訳ないという気持ちでした。そんな時、当時の上司が「残業せずにバイヤーとして仕事ができるのは素晴らしい」と私を褒めてくれたのです。その言葉で、いかに短時間で仕事をやり遂げるかということに前向きに考えられるようになりました。

その後、出向して約50人の子会社の社長になったのですが、年上の部下もいる中で「社長」と呼ばれるたびに謙遜の気持ちでいました。ですが、従業員たちは私に社長という役目を求めている、自分はこの役割を全うすることが謙遜より大切なのだと気づきました。社長として、就任当初は赤字だった会社をみんなと一緒に黒字を目標に頑張ってきたことは、自分自身も成長を実感できた経験です。

会社の中には性別だけでなく年齢や価値観など様々なギャップがたくさんあります。それぞれの立場がわかり合えない中では人間関係はうまく構築できません。人事の担当として、そのギャップを埋めてコミュニケーションを繋ぐことで、部門を越えて活発なディスカッションができるような職場づくりに取り組んでいきたいと考えています。組織の中では人間関係の煩わしさや難しさも当然ありますが、私は様々な価値観を持つ人や意識のギャップを持っていたメンバー同士が共通のゴールを目指して達成するという醍醐味は、一人では絶対に成し得ない大きな喜びだと思います。そんな“組織で働く醍醐味”をみなさんにも味わっていただきたいと思っています。